

## 誓子の「つきぬけて天上の紺」の真意

高橋 進

愛知県みずほ大学瑞穂高等学校

Shin Takahashi

Mizuho Senior High School

## 1. 山本健吉説への疑問

つきぬけて天上の紺曼珠沙華

昭和十六年に作られたこの句は、多くの教科書に採用されており、人口に膾炙された句である。この句について山本健吉は『定本現代俳句』において、「曼珠沙華のすっきりと立ったさまを、紺碧の空を突き抜けていると誇張的に言ったのである<sup>注1</sup>」と解釈している。

はたして誓子は、曼珠沙華が紺碧の空を突き抜けていると誇張的に詠んだのであろうか。誓子は作句法の第一に写生を挙げているだけでなく、『自選自解山口誓子句集』において、「つきぬけて天上の紺」は、くっつけて読む。つきぬけるような青天とは、昔から云う」と記している<sup>注2</sup>。

それにもかかわらず、曼珠沙華が紺碧の空を突き抜けるという山本説によって、多くの人は曼珠沙華が空を突き抜けた様子だと解釈してしまっているのである。

また、ある年の俳人協会夏季俳句指導講座（愛知）で、講演者が「曼珠沙華を下からのぞき込んで空につきぬけた様子だ」と受講者である教員に説明していた。これは明らかに『定本現代俳句』に書かれた山本説の影響を受けた解釈であり、この講演を聞いた教員が教室で曼珠沙華は空をつきぬけていると授業をするのではないかと心配している。

そして、日本全国の中学校や高等学校の現場の教員は、教科書会社の作成した教授資料を参考にして授業を行っている。この指導資料においても『定本現代俳句』からの引用があり、解釈がなされている。この山本説に従った教授資料を読んだ教員の授業で、曼珠沙華が空をつきぬけた句だとレクチャーをしていたならば、生徒に俳句のおもしろさや素晴らしさを教えることはできるのかと危惧を抱いた。よって、誓子の「つきぬけて天上の紺」の独自性に迫ることによって、当該句の真意を明らかにしたい。

## 2. 当該句の詠まれた背景

さて、誓子は、過去の『凍港』『黄旗』『炎昼』の三

句集において、新しい素材を詠むことに苦心してきた。昭和十年には、「ホトトギス」を辞し、水原秋桜子の「馬酔木」に参加した。このころ、肋膜炎に急性肺炎を併発したが、かろうじて死地を脱出した。しかし、第四句集『七曜』の昭和十五年になると再び体調を崩して、療養しながら句作をつづけていた。

平安丸

① 病めるわれ夕焼けて船と赤らめる

② 船夕焼け病者の手帖文字なし

五月には伊豆川奈にて療養して、

伊豆

③ 病者指を涵すプールを愛しみて

④ 夏雲の壮子時なるを見て泪す

用例①から③では、「病めるわれ」や「病者」を詠んだ句が並んでいる。そして、④の「夏雲」の句は、自分は男盛りであるが、病人である。しかし、夏雲は気力・体力ともに充実した男盛りのように見え、とても羨ましいと詠んでいる。

新田丸

⑤ 一夏の詩稿を浪に棄つべきか

宰相山

⑥ ひとり膝を抱けば秋風また秋風

九月には箱根強羅にて療養して、

箱根山中

⑦ 蟋蟀が深き地中を覗き込む

続箱根山中

⑧ 愉しまず晩秋黒き富士立つを

と自分の鬱屈とした気持ちを詠んだ。

そして、誓子は、高浜虚子や谷崎潤一郎、川端康成といった文豪たちが宿泊したことのある蒲郡の常磐館に転地療養して、

鶴

⑨ 夜に着きし海辺ぞ凍てし鶴のこゑ

⑩ 爛爛たる星座凍鶴並び立つ

- ⑪ 凍鶴の啼かむと喉をころろころ  
 ⑫ 凍鶴の筒声天に申しける  
 ⑬ 凍鶴は夜天に堪へず啼くなめり  
 と連作を詠んでいる。この常磐館の園内には動物園があり、鶴が飼われていた。この鶴を間近に見て、対象に目を注いで句を作っている。病に伏せるこのころの誓子について、平畑静塔は誓子の「暗黒の時代<sup>注3</sup>」とネーミングしている。このころの句は、鬱鬱としているが、誓子独特の研ぎ澄まされた感覚にあふれた作品を挙げることができる。

#### 静臥抄

- ⑭ 新年の病臥の幾日既に過ぎ  
 ⑮ 静臥の身寒き分秒過ぎゆけり  
 ⑯ 虻翔けて静臥の宙を切りまくる  
 ⑰ 静臥の儘春日落ちてただ茜  
 ⑱ 晩春の午後の静臥の雲多き  
 ⑲ 手に匂へる地蟻を吹きつあはれ静臥  
 ここに挙げた句において作者が自分の様子を「病臥」「静臥」と詠んで、やるせない気持ちが伝わってくる。特に⑯「虻」⑰「春日」⑱「雲」⑲「蟻」と身近にある対象をじっと見つめて句を作っていることがわかる。我々が俳句を作るとき、調子の良い場合と悪い場合がある。言い換えると、体調がすぐれないときや、精神的に安定しない場合もある。このようなときでも俳句を作りたいと思うときには、身近にある対象をじっと見つめて句を作るべきである。このことを誓子は、身を以て教えてくれている。その後、誓子は、四日市に転地して、

#### 海村抄

#### 病快きときは

- ⑳ 露更けし星座ぎつしり死すべからず  
 と作句している。この㉑の前書きに「病快きときは」とあるように、病が癒えてきたころに作られた句である。そして、昭和十六年には、胸部疾患のために大阪住友合資会社を休職して、四日市の富田に移り住んだ。このことによって、やっと病が癒えてきて、明るさを取り戻した。当該の「つきぬけて」の句が作られたのはこの時期である。したがって、当該句について、曼珠沙華が紺碧の空を突き抜けているというようなメルヘンの世界を描いているという考えには承服しがたい。

### 3. 「つきぬけて天上の紺」の独創性

#### 1

山本健吉が当該句について、曼珠沙華が紺碧の空を突き抜けていると鑑賞したのは、「つきぬけて」で一度切って読んでいることが原因として挙げられる。

はたして山本説のように解釈することができるのであろうか。もし、山本説のように曼珠沙華が紺碧の空

を突き抜けている様子を詠んでいるならば、誓子は、曼珠沙華天上の紺つきぬけてと詠むのではないだろうか。いや、誓子が本当に詠みたかった内容はやはり、つきぬけて天上の紺曼珠沙華であったと考えるべきであろう。

また、「つきぬけて」「天上の紺」「曼珠沙華」と分けて読むとどうであろう。これでは、三段切れになってしまい、当該句が現在まで名句として残ることはなかったであろう。

#### 2

それではどのように考えればいいのであろうか。

- ㉑ 相変わらず空の底を突き抜けた様な天気だ<sup>注4</sup>  
 と明治三十九年発表の夏目漱石の『坊っちゃん』にある。この例によって明治時代から、秋の晴れ渡った青空を「つきぬけたような空(青)」と表現していたことがわかる。山本健吉は、明治四十年生まれであるが、長崎で生まれ育ったので、このような言葉の使い方をしなかったのかもしれない。しかし、誓子は明治三十四年に京都で生まれながらも明治四十二年に祖父の脇田嘉一とともに東京(千駄ヶ谷)に移っている。翌明治四十三年には麻布へ、明治四十四年に芝新堀町へと転居している。この東京での生活は明治四十五年樺太へ転居して終わってしまうが、言語形成期に東京で過ごしたことによって、晴れ渡った空のことを「つきぬけたような空(青)」と慣用的に使うようになったのであろう。

また、誓子は、多くの本の言葉や日常談話を取り入れて句を作っている。

- ・流氷や宗谷の門波荒れやまず
- ・粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり 『万葉集』七・一二〇七番歌
- ・海女の春岩間の波の波のむた  
 柿本朝臣人麿、石見国より妻に別れて上り来る時の歌二首
- ・…か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕羽振る 浪こそ来寄せ 浪の共 か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば…  
 『万葉集』二・一三一番歌

このように「門波」「波のむた」と『万葉集』特有の言葉を詠み込んで、句を作っている。そして、

どんよりと利尻の富士や鯨群来

唐太の天ぞ垂れたり鯨群来

北海道や樺太において使われていた「鯨群来」という日常談話を生かして句を作っている。このように誓子は、句に詠む素材を古典に求めるだけでなく、話し言葉をも素材にして句を作っていることがわかる。

それに、誓子には次の句がある。

- ㉒ 凍て滝に白玉楼といふ語あり

誓子は、この句を昭和四十三年三月に『奥の細道』の旅を追体験するなかで華嚴の滝を詠み、句集『一隅』に収めている。この②④について塚腰杜尚は、「白玉楼中の人となる」という故事がある。これは唐の文人李賀の臨終に天使が来て、「天帝の白玉楼成る、君を召してその記を作らしむ」と告げたことからきたもので、古来、文人墨客の死ぬことを意味することとされている<sup>注5</sup>。

と述べている。つまり、この②④では「白玉楼」という語を詠み込んで、故事を表す句となっている。以上から、誓子は古典文学や日常談話を取り入れて句を作っていることがわかった。そこで、当該句では「つきぬけて天上の紺」と詠むことによって、つきぬけたような空（青）という慣用句の内容を表現していると考えられた。

### 3

それでは、「つきぬけて天上の紺」「曼珠沙華」と切って読むためにはどのように考えるべきなのか。誓子は俳句を作る生活の中で、漢詩だけでなく、古今東西の名著を読み込んでいる<sup>注6</sup>。

日本文学の伝統において、短歌や俳句の修辞技法の一つとして対比の技法がある。そこで、当該句においても対比の技法を使っていると考えたらどうであろうか。次に誓子に影響を与えた俳人の句の中で対比の技法が使われている句をあげる。

#### 1 松尾芭蕉の対比

- ②③ 草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
- ②④ 夏草や兵どもが夢の跡
- ②⑤ 住みつかぬ旅のこゝろや置炬燵

誓子は、芭蕉の句を研究し、自分の句に生かしていた。『奥の細道』に収められている②③「草の戸も」の句については、芭蕉が「草の戸」に住んでいたが、旅に出るために引越したため、この家には雛人形を飾る家族が住むようになったことを詠んでいる。この句では「草の戸」と「雛の家」を対比して詠んでいるといえる。同じく『奥の細道』より②④「夏草や」の句は、小高い高館の跡から平泉の地を眺めると「夏草」が茂っているが、昔は義経の一族や藤原氏の一族らが栄華の夢に耽った跡であるという意である。現在は夏の草ばかりになってしまったという自然と「兵どもが夢の跡」という昔の人々のはかなさを対比して詠んでいる。②⑤「住みつかぬ」の句は、『猿蓑』に収められている句で、芭蕉の旅に出たいという気持ちと家にあるままの置炬燵を対比として詠んでいる。

#### 2 正岡子規の対比

- ②⑥ 赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

近代に入るとまず、正岡子規の句が挙げられる。この②⑥は明治二十七年作で、「赤蜻蛉」の飛んでいる近景と雲の浮かんでいない「筑波」山の遠景を対比の技法を使って詠んでいる。

#### 3 高浜虚子の対比

- ②⑦ 遠山に日の当りたる枯野かな
- ②⑦ は、明治三十三年作。「遠山」と詠まれている日の当たっている遠景と日の当たっていない「枯野」という近景を詠んでいる。よって、この②⑦でも遠景と近景の対比の技法が使われていることがわかる。

#### 4 飯田蛇笏の対比

- ②⑧ 芋の露連山影を正しうす
- ②⑧ 教科書によくのっている②⑧は、大正三年作。芋の葉にのった「露」が近景にあり、「連山」（＝南アルプスの山々）が遠景にある。この②⑧も近景と遠景の対比の技法が使われた句である。

#### 5 渡辺水巴の対比

- ②⑨ 昼寄席に晒井の声きこえけり
- ②⑨は、大正五年作。うす暗く、けだるい感じのする「昼寄席」と明るい夏の太陽のもの、にぎやかな「晒井」が詠まれ、寄席の内と外の対比が描かれている。

#### 6 原石鼎の対比

- ③⑩ 青天や白き五弁の梨の花
- ③⑩ は、昭和十一年作。青空のもと梨の花が咲いている情景が詠まれている。この句では、青色と白色の対比という色の対比が表現されている。

#### 7 中村草田男の対比

- ③⑪ 万緑の中や吾子の歯生え初むる
- ③⑪は、教科書によくのっている昭和十四年に作られた句である。木々が青々とした季節に、子に歯が生えはじめた作者の喜びを詠んだ句である。木々の緑と生えだばかりの歯の白を対比の技法を使って表現している。この句も青と白の色の対比を詠んでいる。

#### 8 山口誓子の対比

- ③⑫ 七月の青嶺まぢかく溶鉢炉
- ③⑬ 炎天の遠き帆やわがこころの帆
- ③⑭ 蟋蟀の無明に海のいなびかり
- ③⑮ 鶉篝の早瀬を過ぐる大炎上
- ③⑯ 一湾の潮しづもるきりぎりす
- ③⑰ 「七月の」の句（昭和二年作）は、「七月の青嶺」と「溶鉢炉」の緑と赤の対比。
- ③⑱～③⑲で見たように、日本の文学史において芭蕉の時

代から対比の技法を使って句を詠む伝統がある。なかでも②⑥⑦⑧のように「遠景」と「近景」を詠む句が明治・大正時代に見られた。それが、⑩⑪のように昭和に入ると色の対比を詠むようになった。つまり、②～⑧、⑩の句が「自然」と「自然」を対比させている。しかし、誓子の⑫は「七月の青嶺」という自然と「溶鉱炉」という人工物を対比させて緑と赤の色を詠んでいるのである。

そして、⑬「炎天」の句（昭和二十年作）は、「炎天の帆」という実と「こころの帆」という虚の対比の句。⑭「蟋蟀」の句（昭和十七年作）は、「蟋蟀」には見えない「いなびかり」が、海の沖できらめいていることを詠んでいる。⑮「鵜篝」の句（昭和三十一年作）は、明と暗の対比を詠んでいる。⑯「一湾の」の句（昭和二十四年）について、誓子は「海は、伊勢湾、大きな海だ。それが全体しんとしずまりかえっている。海がしずまるというのは、そこに充満している潮がしずまりかえっている（中略）大きな寂靜の、すぐ近くに、かすかなれども、きりぎりすが、鳴きつづけている<sup>注7</sup>」と記している。つまり、静と微音の対比を句の骨格として作句している。

このように誓子是对比の技法を用いて多くの句を作っていることがわかる。特に当該の「つきぬけて」の句が②⑥⑦⑧のように遠景と近景を詠む対比の伝統を踏まえているならば、「つきぬけて天上の紺」は遠景を、「曼珠沙華」は近景を詠んでいると考えられる。それだけでなく、⑩「青天や」、⑪「万緑の」、⑫「七月の」の句と同じように色の対比を詠んでいるのではないだろうか。

それでは、誓子は「曼珠沙華」をどのように詠んでいるのかを検討していくことにする。

- ⑰ 日々海を見つ眼に欲る曼珠沙華
- ⑱ 曼珠沙華暮れていつまで青堤
- ⑲ 篠原を風吹き分くる曼珠沙華
- ⑳ 草隠れ咲く曼珠沙華幾許ぞ
- ㉑ 町中に草場その曼珠沙華

誓子の「曼珠沙華」の句は、当該の「つきぬけて」の句を除くと六十九句ある。それらを制作順に並べてみると、『七曜』の昭和十六年から『激浪』の昭和十九年に作られた句において「曼珠沙華」は⑰「海」、⑳㉑の「草」、㉒「青堤」、㉓「篠原」といった青いものと一緒に詠んでいることがわかる。特に、⑰「日々海」の句は、当該句と同様に句集『七曜』に昭和十六年作として収められている作品である。誓子の心のなかには、「曼珠沙華」の赤色には、青色のものがふさわしいという潜在的な意識があり、当該の「つきぬけて」の句も同じ意識で作られたのであろう。

- ㉔ 曼珠沙華地主の竈燃えみたり

- ㉕ 共に立つ朱塗鉄筋曼珠沙華

- ㉖ 田の畦に朱の鋼材と曼珠沙華

それが昭和二十一年以降になると、「曼珠沙華」の赤と燃えている㉔「竈」の赤を詠む句が現れてくる。そして、晩年の平成元年には、㉕「朱塗鉄筋」と「曼珠沙華」、㉖「朱の鋼材」と「曼珠沙華」を詠んでいる。これらの例によって、誓子が終生、曼珠沙華を赤いものとして何かと取り合わせて詠むことに取り組んできたと考えられる。

以上のことから、「つきぬけて天上の紺」の部分は空の青さを表し、「曼珠沙華」という彼岸花の赤色との対比を詠んでいるといえる。つまり、当該句は、「自然」と「自然」を取り合わせて、青と赤の色の対比を表現した点に誓子の独自性がある。これまで山本健吉を含めた全ての読者は青色と赤色の対比の句を読んだことがなく、「つきぬけたような空（青）」という日常談話の思い浮かばなかった。それだけでなく、斎藤茂吉の短歌を終生読みつづけた誓子と、折口信夫に師事した山本健吉との言語観の違いがあったのかもしれない。よって、山本健吉は当該句について曼珠沙華が空を突き抜けたと解釈をしたのだと思われる。

このように誓子の句は、単純な構造の句ではあるが、奥深く味わい深いものがある。平畑静塔によれば、この句を作ったころの誓子は、「外淡にして中滋<sup>注8</sup>」ということをも自分の作風のかがみとして心がけていた。この句はまさにそのような句の代表例と言えよう。すなわち、病んでいる時は暗く物をじっとみつめる句が多かった。しかし、病が癒えてきた誓子は青色と赤色の対比を使って、自分の晴れ晴れとした気持ちを当該の「つきぬけて」の句に詠み込んでいると考えられる。四、結び山本健吉の『定本現代俳句』の川崎展宏の「解説」には、「山本健吉の『現代俳句』は、この『定本現代俳句』に至るまでに、新書版『現代俳句 上巻』（昭二六・六）、同『現代俳句 下巻』（昭二七・一〇）、改訂増補・合本『現代俳句』（昭三七・一〇）、文庫本『現代俳句』（昭和三九・五）、選書版『新版 現代俳句 上巻』（平二・四）、同『新版 現代俳句 下版』（平成二・七）の経過を辿っている」とある。

しかし、山本健吉は昭和六十三年に亡くなるまでに<sup>注2</sup>で挙げた『自選自解山口誓子句集』を読む機会があったであろう。だが、山本健吉は『現代俳句』のこの箇所の記述を書き変えないまま平成二年に選書版『新版 現代俳句 上巻』が出版され、平成十年に出版された『定本現代俳句』の当該句についての記述も書き変えられることはなかった。

これまでの検討の結果から、当該句は曼珠沙華が紺碧の空を突き抜けていると解釈するのではなく、「つき

ぬけて天上の紺」と「曼珠沙華」の青と赤の色の対比を詠んだ句であると考えられる。よって、中学校や高等学校において当該句をレクチャーする場合には、まず俳句には対比の技法を用いた句があることを教える。そして、当該句を示すことによって、生徒自身が当該句では対比の技法が使われていることを発見させる授業を展開したい。その上で、「つきぬけて天上の紺」は誓子が創出した独創的表現であることを味あわせたい。

注

- 1 山本健吉『定本現代俳句』 角川書店 平成十年
- 2 山口誓子『自選自解山口誓子句集』 白鳳社 昭和四四年 九一頁
- 鷹羽狩行編著『誓子俳句365日』 梅里書房 一九九七年 村上冬燕担当には、「つきぬけて天上の紺」は、つきぬけるような紺の空と解すれば、よく理解される（一七三頁）とある。
- 3 平畑静塔『「京大俳句」と「天狼」の時代』沖積舎 平成二十年 一六〇頁
- 4 『漱石全集』 漱石全集刊行会 昭和十一年 三〇一頁
- 5 『俳壇』 本阿弥書店 二〇〇一年十一月号  
「特集・山口誓子俳句との戦い門下51人私の愛する誓子の一句」